

翻訳

大学というものの観念
(The Idea of a University)

マイケル・オークショット
桜井 直文 訳

〈翻訳〉

大学というものの観念 (The Idea of a University)

マイケル・オークションョット
桜井 直文 訳

訳者解題

以下に紹介するのは、イギリスの政治哲学者マイケル・オークションョット (1901-1990) が、大学教育とりわけ教養教育の意味について論じたつぎのみじかいエッセーの全訳である。

Michael Oakeshott, *The Idea of University*, in *The Listener* 43, pp. 424-6, 1950. (のちに, Michael Oakeshott, *The Voice of Liberal Learning*, Yale University Press, 1989; repr. Liberty Fund, 2001. に収録。)

初出の年をみてわかるとおり、このエッセーが書かれたのは先の大戦の直後である。そんな昔に書かれた文章が、いま読んでみてもくびくびして古びてはおらず、そのみずみずしさをなお保っているようにみえるのはひとつの驚きである。もちろん、行間から、戦後の (アメリカ的な?) プラクティカルな方向での教育改革にたいして抵抗しようとしていたオークションョットのすかたもまた、かいま見える。このエッセーが、『リベラル・ラーニングの声』というかれの教育論・大学論を集めた論文集に収録されてふたたび日の目をみたのは、一九八九年のことである。八〇年代の後半とは、六〇年代後半から七〇年代にかけての大学をはじめとする教育の場を舞台にしてのいわゆる「若者の反乱」がようやく収束し、その間、価値多元主義やサブカルチャー重視といった当時の教育のなかにあらたにとりこまれた要素にたいする反省があらためてなされた時期にあたる。こうしたとき出版され、とりわけアメリカの大学関係者の話題を独占した本が、アラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』 Allan Bloom, *The Closing of the American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, Simon & Schuster, 1987. だった。ブルームの批判の矛先はまさに、こうした大学の「ポップ・カルチャー化」にあり、魂を無気力にする価値相対主義の「病い」から学生のところを目標めさせ、自由とデモクラシーという「アメリカン・マインド」に立ち返らせるためにも、大学における伝統的な古典教育の復権が必要であると主張したのである (よく知られているように、ブルームは、今日のアメリカの政権をささえている「ネオ・コン」)

の論客たちの精神的な「父」である。ちなみに、その「祖父」は、これもよく知られているように、ブルームの師、レオ・シュトラウスである。オークショントの上記論文が出版されたのは、このブルームの本の二年後であるが、これは決して偶然ではない。このことは、同論文集の序文を書いたフラー・Timothy Fullerが、その序文の末尾でアラン・ブルームの一件にわざわざ言及していることからもわかる (*loc. cit.*, p. xxxii et seqq.)。ブルームが指摘している大学の「頹廢」について、その診断にうなずく人びとも、だからといって、そのすべてが、ブルームの処方箋をも受け入れられるわけではない。オークショントもまたそうした (ブルームの意見に留保する) 人びとに属する。オークショントにとっても、大学というところでもっともだいたいなのは、かれのいう「会話」がなりたっているということであり、人びとが「会話」のしかたをわきまえているということ (オークショントのいえる「会話人 conversationalist」であること) なのである。そうした大学における「会話」の可能性を閉じようとするものは、それがブライカイカルな方向性であれ、また、ブルームの古典教育のおしつけであれ、オークショントの組み立てるところではない。かれの大学教育論をあつめたものが、八九年にあらためて出版されたのは、いわゆる「六八年」的でも、また、ブルームのでもない第三の立場の可能性を (まさにブルームのまきおこした波紋のあとに) あらためて人びとのあいだで確認したいということであつたのではないだろうか。そしてその十二年後の二〇〇一年、この論文集はふたたび復刻出版されている。今回訳出した論文が書かれた年から数えるとなんと半世紀あまり。二十一世紀にはいった今日においてもなお、かれのことばを必要とする状況がふたたび生じていると言へばきだるうか。いずれにしても、大学が大学でなくなろうとしているとき、オークショントのことばは、それにたいする警鐘としてつねにくりかえし聞かれ、読みかえされなければならない、といえるだろう。

オークショントの主要著作は、上記論文集以外に、*Experience and Its Modes*, 1933.; *Rationalism in Politics*, 1962. (邦訳に二種あり。嶋津格ほか訳『政治における合理主義』(勁草書房, 1988) と、濫谷浩ほか訳『保守的であること——政治的合理主義批判』(昭和堂, 1988)); *Hobbes on Civil Association*, 1975.; *On Human Conduct*, 1975. (野田裕久訳 (抄訳)『市民状態とは何か』(木鐸社, 1993)); *On History and Other Essays*, 1983. などがある。かれの教育論・大学論としては、今回訳出したものが、おそらくわが国ではじめての紹介である。

この翻訳の原型はもととも、二〇〇四年七月一日に明治大学和泉研究棟でおこなわれたシンポジウム「教養教育の危機」(和泉委員会、明治大学教職員組合、明治大学専任教員連合会の共催。司会、佐原徹哉氏)で、遠藤紀明氏、初見基氏とともに、わたしがかパネラーのひとりをつとめたとき、参考資料としてフロアにくぼけたものである。この大学でも各所で進行中のカリキュラム等の諸「改革」が、その担い手の善意にもかかわらず、否、その善意のゆえにかえっていつそう深刻に、大学を大学でないものに変えてしまふようなことのないよう、せつに願う。(桜井直文)

わたしがいつも好んで言っている説があります。それは、「理念 (ideals)」とか「目的 (purposes)」ということばで人びとが呼んでいるものはけつしてそれ自体、人間の活動の源泉ではない、ということばです。というのも、そうしたことばで呼ばれるものは、「人間の」行為というものを真にならたせているものを切りつめて表現しているだけなのであって、「人間の」行為とは、あることをなすときの「身心の」構え (disposition) であり、かつ、それをどうなしたらいいかということについての知識だからです。人間というものは、実現されるべき目的にこそろひかれるときだけに、休息からたちあがって活動しはじめる、というわけではないのです。生きていくということがある目的なものは、このあるいはあの活動にどのようななかたでかかっている目的なものは、このあるいはあの知識を要約したかたちで示しているものにすぎません。

このことはたとえれば、われわれが「科学」と呼ぶ活動においてあきらかにそうです。科学的な活動とは、あらかじめ考えぬかれた目標なるものを追求することではありません。というのも、その活動がいったいどこにたどりつくのか、だれも知らないし、また、想像することもできないからです。[科学においては] われわれがところのなかにならからかじめ思いえがくことができような完成されずがたがたなどないのです。つまり、それによってわれわれが現在どの程度まで到達したかを判断する規準としてたてることができるような完成されずがたなどないのです。科学を科学としてなりたせているもの、そして、科学にその動力と方向づけをあたえているものは、到達されるべきものとしてあらかじめ知られていない目的ではなく、科学的な探究をどのように遂行したらいいかということについての科学者たちの知識です。科学者たちがおこなう個々の追求やうちたててくる個々の目的は、そうした知識にうえからおしつけられるものではなく、そうした知識のなかから生まれてくるものです。あるいは、もうひとつの例をだしますと、料理人 [コッ

ク]とは、まずはじめにパイについての構想をもち、しかるのち、その構想を实地にたためず者のことではありません。というのも、料理人とは、料理法[コック術]に熟達した者のことであって、かれがつくろうと思うものや実際につくりましたものは、かれのその熟達からうまれでてくるものだからです。あるいは、第三の例をだしますと、ひとは、人生においてなすべき「使命」が自分にはあるのだと思うかもしれません。そして、自分の活動は、その「使命」によって支配されていると思うかもしれません。しかし実際は、逆なのです。というのも、かれのいわゆる使命にもとづく活動は、どうやたらある一定のしかたでふるまえるかということを知っている、ということなのです。また、そういうしかたでふるまおうとつとめる、ということなのです。かれが自分の「使命」と呼んでいるのは、かれのこうした知識や努力を切りつめて表現したものにすぎないのです。

そういうわけで、今日、大学の「使命」だとか「機能」について語られていることは、どうも理解できないのです。というのも、そうしたことはで言わんとしていることがなんであるかは理解しているつもりなのですが、そうした言い方が、わたしには、不幸な語りかたのように思われるからなのです。こうした語りかたが前提としてしているのはつぎのようなことです。すなわち、「大学」と呼ばれるなにかがあって、それは、ある種の「なんらかの目的のためにつくられた」装置であり、十分なお金があればそこからなにか[大学とは]べつのものでつくりますことのできるようななにかであり、「それはなんのためにあるのか」という問いが意味をもつようななにかである、ということ。そして、今日の諸大学にたいする批判のひとつは、それらの「機能」が、そうであってしかるべきほどには明瞭ではない、ということ。す。[こうした批判にたいして]わたしはまったく驚きません。われわれの大学において、批判されてしかるべきことは山ほどあります。しかし、大学の「機能」が明瞭でないかからといって大学にケチをつけることは、大学というものの性格をとりちがえることです。大学とは、ある特定の目的を実現し

たり、ある特定の結果をうみだすための機械ではありません。というのも、大学とは、あるしかたであられた人間の活動(a manner of human activity)だからです。もちろん大学が、ある特定の目的を追求しているのだといて自分を宣伝することが必要になることもあるかもしれません。しかしそれは、そうしたことを語る相手があまりにも無知なので、かれらにたいしては、赤ちゃんコトバで話してやらなければならない場合や、大学が、自分のところにやってくる人びとをうけとめる自分の能力についてほとんど自信がもてなくなってしまうと、自分の偶然的な「非本質的な」部分での魅力にうったえざるをえなくなっているような場合にかぎります。しかし、わたしの印象では、われわれの諸大学は、こうしたことが必要になるほどには、まったく落ちぶれていません。それらは、自分たちが「なんのために」あるか知らないかもしれません。また、自分たちの「機能」についてきわめてぼんやりした考えしかもっていないかもしれません。しかし、それらは、そうしたことよりはるかに重要ななにか、すなわち、大学が大学であるためにはどんなふうな仕事をしたらいいか、ということとをまぢがいなく知っていると思われると思います。この知識は、[その当事者にあたえられた]自然の賜物ではありません。というのも、それは、ひとつの伝統の知識であり、獲得されなければならぬものであり、[したがって]つねに、誤謬や無知とまじりあって、ときには失われてしまうことさえあるものだからです。しかし、この種の知識(そうした知識が完全に失われてしまったことはない)とわたしは信じます)のなかに分け入ることによってしか、大学の「観念」と呼ばれうるものをわれわれが発見することは望みえないのです。

ひとつの大学とは、ある種の活動に従事する一定の数の人びとのことです。中世においてはその活動はストゥディウム(Studium)[努力/研究]と呼ばれました。われわれはその活動を「学びをもとめること(pursuit of learning)[学問の探求]と呼んでもいいでしょう。この活動は、文明生活(a civilized way of living)の特質のひとつであり、まことにその徳のひ

とつなです。というのも、学者は、詩人、聖職者、兵士、政治家、そして、商人とならんで、文明社会のなかでその場所をもつからです。しかし、大学は、こうした活動を独占しているわけではありません。自分だけの研究場所をもつ隠遁の学者、ある特定の学問分野で有名なアカデミー〔専門学校〕、年少子どもたちのための学校、それらもまた、それぞれ、この「学びをもとめる」という活動に参加していますし、それぞれにおいて尊敬されるべきものです。しかし、それらは大学ではありません。大学を「それらからきわだたせているのは、学びをもとめることに、ある特殊なしかたで従事しているということなのです。大学とは、それぞれがある特殊な学問分野〔の研究〕に献身している学者たちの協力体 (a corporate body) なのです。すなわち、大学に特徴的なことは、ひとつの協同的なくわだて (a cooperative enterprise) として、学びをもとめるということなのです。この団体の構成員は、世界中にちらばらばらばらばらいて、ときに会ったり、あるいは、まったく会わなかつたりという人びとではありません。かれらは、おたがいの近くにいつも住んでいます。したがって、われわれが大学について考えるとき、それをひとつの場所として考えることをやめてしまつたら、大学というものの性格それ自体をなしている〔重要な〕部分を無視してしまふことになるでしょう。そればかりでなく、大学とは、学びの根拠地 (a home of learning) なのです。すなわち、学び〔学問〕の伝統が保存され、〔未来にむけて〕おしひろげられる場所であり、学びをもとめる〔学問探求の〕ために必要な装置が集められてきた場所なのです。

大学を構成する学者たちのなかでも、ある人びとは、その余暇をそっくりそのまま学び〔学問〕に献げることが期待されています。そして、かれらの同僚たちは、かれらと会話することであつたものの知識にふられる利得をもち、〔外部の〕世間も、おそらく、かれらの書いたものから利益をええます。この種の学者のいない学びの場所は、大学とはほとんど言えません。しかし、他の学者たちは、学ぶだけでなく、かれら自身が教えることに従事します。し

かしここでもまた、かれらがなすのは、ある特殊なしかたでの教育的企てであつて、それが大学を〔他の学びの場所から〕きわだたせているのです。教えられるために大学にやってくる人びとは、自分たちがたんなる初心者ではないということを示す証拠を提示しなければなりません。かれらのまえには、教師たちの学識が展示されるばかりでなく、研究の kari kyū ru が示され、テストと学位授与がそれにつづきます。こうして、三種の人びとがわかれわかれが知っているような大学を構成することになります。すなわち、〔純然たる〕学者、教師でもある学者、そして、教えられるためにくる人びと、すなわち、学生 (undergraduates)〔学部生〕です。そして、これらの三種の人びとの存在と、かれらのあいだで成立している諸関係が、「学びをもとめること」とわれわれが呼ぶより広くわだてのなかでの大学というものの〔他とは区別された〕きわだつた場所を決定するのです。

これら三種の人びとの活動を「一つひとつ」考えてみることにしましょう。そうした活動についてすこしでも知っているひとははだれでも、つぎのことを知っています。すなわち、学びをもとめることと、情報をえること (acquisition of information) とはちがうということです。これは微妙なちがいです。というのも、情報が十分でないひとは、学識ある (learned) ひとはまず呼ばないからです。しかし、学者とは、たんにとるにたらない些末事を集めてまわるひとのことではありません。かれは、自分をもとめているものがなんであるかということについてなにごとかを知っています。またかれは、自分が知っていることと知らないことを区別することができます。「あわれな拙学者 (poor pedant)」にたいする世間の侮蔑は、おおくの場合まちがっています。というのも、そうした侮蔑は、学者の活動をその有用性によって判断し、それが役にたたないようにみえるとき、それを学問的だ (pedantic) と思うからです。しかし、これはいつわりの規準なのです。というのも、非難されるべきなのは、直接役にたたない知識の追求でも、学問探究 (scholarship) においては避けられない細部へのこだわりでもなく、たんな

る断片にすぎない学問の断片のあいだをなんのあてもなく手探りで歩き回ることだからです。学問探究はときにそうしたものに墮落することがあります。しかしこうしたことは、世間が考えるほどしばしばおこるものではありません。むしろ、大学ほど、こうしたことがおこりにくい場所はほかにないのです。

実際、学び「学問」の世界 (world of learning) をつくりあげるのがなんであるかを決定する単純なやりかたというものはありません。というのも、学び「学問」の諸部分を正当化すべきどのような明瞭な理由 (たとえば、「有用性」といった) も見いだされなからずです。そうした諸部分が表現しているものは、「そうした諸部分にさきだって」あらかじめ考えられている目的ではなく、ゆるやかに変化している伝統なのです。年月がたつにつれ、あたらしい諸研究が地平線のうえにすかたをあらわし、ふるい諸研究は、そうしたあたらしい諸研究と接触することによって若返ります。学者のひとりひとりが、ある意味での専門家であって、ある選りされた領域を開拓しているということは避けがたいことです。しかし、こうした領域がきわめて狭い領域にとじられていることはめったにありません。また、ひとりの学者はしばしば、ひとつの研究からつぎの研究へとくら替えし、かれの中心的な仕事ではないことながらも鼻をつっこむことがあります。しかし、それにもかかわらずやはり、学びをもとめるところ「学問の探求」は、断片的なくわだてであるようにみえるかもしれません。そして、そのようにみえるのは、「そうした学問探求が」たんに外側からのみみられているからだと疑われるとしても、それでもなお、そうした「学問の」探求の全体に一貫性をつりあいをあたえるための種の上位の統合力ともめられているのではないかと、たずねてみることは、けっして不自然なことではないように思えます。おそろくつぎのような問いがたてられるでしょう。すなわち、われわれにはある地図、すなわち、学びの世界の諸部分どうしの関係が明瞭に示されているような地図が必要ではないか。また、ちょっととした接着剤をもって全体をひとつにま

とめるなら、そうした全体がもっとよくなるのではないかと、といった問いです。そして、こうしたことをもっともよつよつと感じているだけか、諸科学のあいだの隙間に「文化」と呼ばれるネバネバするなにかを注入しにあらわれるといふことになるのです。しかも、きわめて必要とされているなにかを自分たちは供給しているのだという信念をもって。しかしながら、こうした診断も、また、その治療法も、悲しむべき誤解から発しているのです。

学びの世界は、それをひとつにするために、そこから注入されるセメントのようなものをまったく必要としていません。というのも、その世界の諸部分は、単一の磁場のなかで動いているからです。そして、その隙間を埋める必要が生じるとすれば、それはただただ、「そこに流れていた」電流がいわれなく切断されてしまったときにかぎるからです。学びをもとめること「学問の探求」は、競争者たちが最善の位置を争うレースのようなものではありません。議論することやシンポジウムのようなものでもありません。それは、ひとつの会話 (conversation) なのです。そして、大学 (すなわち、おおくの諸研究の場所としての大学) の特有の徳とは、そうした学びの探求を、この「会話という」性格において示すことにあります。すなわち、それぞれの研究は、「会話における」それぞれひとつの声としてあらわれ、その声のトーンは、暴君的でも悲嘆的でもなく、つましく、会話に適した (conversable) トーンなのです。会話には、議長は必要ありません。あらかじめさだまされたコースもありません。われわれはそれが「なんのため」の会話なのかと問うことはありません。そして、その会話の卓越性をその結論で判断することもありません。というのも、会話には結論はなく、会話はつねに他日にくりのべされるものだからです。会話の統一性は、うえからおしつけられるものではなく、語っているものもろもろの声の性質からわきでてくるものです。そして、会話の価値は、それに参加する人びとのところにそれが残す余韻のうちにあるのです。

そういうわけで、学者とは、学びの活動に従事するしかたを知っているひ

とのことです。ですから、かれの本来の声は、説教者や「基本的な知識を教える」教師 (instructor) のそれではありません。しかし、学者のなかに教師 (teachers) がいるということ、そして、大学とは、なにかを学ぶことができるという期待をもってひとがいくところであるということは、驚くべきことではありません。すべての学者がよい教師になる親和性をもっていはかぎりませんが、しかし、ほんものの学者はすべて、本人がそれを意図するしないにかかわらず、学びのもとめかた「学問の探求の方法」についてかれの知っていることのいくばくかを、それがわかる人びとにたいして伝えるものです。かれの教える力がうまれでてくるみなものは、かれの知識の力と靈感にあります。つまり、かれが、学びをもとめるといふことのなかにひたされていることのうちにあるにすぎません。そうしたことは、学者になろうなどとほとんど考えたことのない人びとにすら感じとられるものです。また、その学識と「教師としての」親和性が十分にあり、自分の知っていることを伝える能力をなみはずれてもっている人びとですら、完璧な「基礎知識を教える」教師 (instructor) とはちがう何者かであると考えられなければなりません。かれらは、もろもろの「学問的な」規則を知っているという点で信頼できるかもしれません。しかし、かれらにとって、結論を教えることはさほど重要ではないのです。ある種の美術学校にいわば、ネコをスケッチするための十とおりの方法や、目を描く際におぼえておかなければならない一ダースもの技法を教えることもありません。しかし、教師 (teacher) としての学者が教えることは、スケッチしたり描いたりするしかたではなく、もの見かたなのです。かれは自分の言いたいことを容易にことばにできるひとかもしれないし、また、自分自身の疑いやためらいをなかなか投げ捨てられないひとかもしれません。しかし、それがかれが学者であるということなのです、ある特定の声をもたずに語るということ、かれの「学者としての」性格には属していないのです。そして、かれは、つぎのような学び「学問」の通俗化とはいっさい関係をもたないでしょう。すなわち、学びを

たんに試験に受かるための手段とみなしたり、資格証書をえるための手段とみなしたりすることです。

しかし、大学は、個々の学者の教える力をこえるある教える力をもっていと考えられるかもしれません。大学とは、その靈感をひとりの秀でた人間からひきだしているアカデミーではありません。というのも、大学とは、学者たちの団体 (a body) であって、かれらは、個人的であれ学問的であれ、さまざまに不完全さをもっていますが、おたがいのそうした不完全さをたがいにおさげないあっているからです。大学は、おおくのさまざまな種類の教師をかかえています。それぞれの種類の教師たちは、他の種類の教師たちとのまじわりから自分たちの力をひきだしているのです。自分の考えを容易にことばにできる才能をもったひと「学者」を「なにかの機会に」われわれが推薦するとしましょう。かれは、すべての質問にたいしてととのった答えをあててくれるでしょう。しかしわれわれがころころにとめておかなければならないことは、かれは、たんにこのうえなく活発な精神をもった人間であるというだけでなく、しばしば、つぎのような人びとのスポーツスマンでもあるということなのです。すなわち、自分の考えをことばにだすことはそれほどじょうずではないが、おそらくはより深い、そして、独創的な精神のもちぬしであって、かれは、そうした人びとと毎日接しているのです。すなわち、かれらがいなくなったら、かれもほとんど存在しえないのです。そういうわけで、大学とは、人類の弱さと無知にきわめてよく適合した制度なのです。なぜなら、その卓越性は、ひとりの万能の天才の登場に依存しているわけではないからです。たとえ、そうした天才があらわれたとき、そうした天才に場所をゆずるしかたを大学がわかきまえているとしても、さらにつくくわえるならば、大学は、下院やふるくからおこなわれてきた商売においてと同様、なにかを、それをことばにだして教えるというのではないしかたで伝えます。そして、そのようにしてそれが伝えるものなかにすくなくともあるのは、会話のやりかた (manners of conversation) なのです。

学者、教師、そして、最後にくるのが、教えられるためにやってくる人びと、すなわち、学生 (undergraduate) です。学生であるかれ、あるいは、彼女もまた、[他の大学構成員とはちがう] きわだった性格をもっています。まずはじめに、かれは、子どもでも初心者でもありません。かれはすでに、どこかほかのところで学校教育をうけ、外海で [航海で] 自分をためてみるのに十分なほど (道徳的にも知的にも) 学んできています。かれは、子どもでも大人でもなく、ある奇妙な人生の中間点にたっています。この時期、かれは、自分自身について、また、自分のまえを通過する世界についてある程度のことを知ってはいるのですが、ただし、それらについてさらに多くのことを知りたいたいと思うのに十分なだけ、そのかぎりでは知らないのです。かれはまだ、かれの愛するものをみだしていません。しかし、[自分にはない] 時間や偶然的なできごとやライバルにたいする嫉妬もまた知りません。おそらく、おとぎ話のなかのきまり文句がかれにはもともとふさわしいでしょう。すなわち、かれは、自分にとっての知的なからもの (intellectual fortune) をさがしにやってきました。しかし、さらに言うと、かれは、学校から大学にやってきた最初の人間ではありません。かれは、なを [大学で] 期待すべきかということについてなにも知らず、したがって、大学にやってきたら、すべてのことをやさしいことばで説明してやらなければならぬような異邦人のような存在ではありません。そして、かれが属していた伝統がかれにすでになにごとかを教えていたとするとするならば、その伝統はかれにつぎのことも教えていたでしょう。すなわち、かれは、大学の三年間のあいだに、かれの知的なからものをいっぺんにみいだすことはないだろう、ということなのです。したがって、われわれはそう想定するのですが、かれは、かれがこれから見いだすことになるものと折り合うことができるし、それを利用するころの準備ができていたのだ、と。

ところで、かれはいついたいなを [大学で] 見いだすのでしょうか。かれが不運でなければ、かれが見いだすのは、力強いあふれるばかりの活動の流れ、

学びをもとめることに従事する男たちと女たち、そして、この活動になんらかのしかたで参加するようにとの誘いです。こうした誘いは、学び [学者] の生活にはいたりたいと思う気持ちにすでに動かされている人びとにも、また、そうした気持ちをまったくもたない人びとにもひとしくむけられます。大学とはけっして、学者を養成するためのしくみではありません。というのも、大学が理想とするのは、学者ばかりが住人となっているような世界ではないからです。イングランドにおいてはこの約四百年間、学者になる人間のための教育と俗人のための教育とはずっとおなじでしたし、この伝統は、大学についてわれわれがもつ観念の一部をなしています。

こうしたことにくわえて、大学は、学生にたいし、ある一定の範囲での多様な諸研究を提示し、そこからかれが選ぶことができるようにしていることがわかるでしょう。というのも、当然のことなのですが、大学は、それが教えることがらについて、取捨選択をくわえていますし、また、学者たちの注意をひきつけているすべてのことがらが、学生の勉強に適していると考えられてはいないからです。[教えられるべき] 個々の科目の選択がどこからあるか、ということとはなかなか言いにくいことです。あるものは古くからあるものであり、あるものは新しい。あるもの (たとえば、医学や法律) はなかば専門的な科目のようにみえますし、他のものは、その世間とほとんど直接的関係をもちません。確実にいえることは、これらの諸研究のどれをとってみても、それらが大学のカリキュラムのなかでその場所をもつとすれば、それは、つぎのような理由によるものではない、ということなのです。すなわち、それが専門的に有用であるといった単純な理由によるものではなく、また、当該の知識が教えやすく、また、テストしやすい、といった理由によるものでもない、ということなのです。実際、[大学で教えられる] これらの諸研究のすべてに共通する唯一の特徴は、それらが、学問探究 (scholarship) の認知された領域であるということなのです。というのも、それぞれの研究には、学びをもとめることが反映されています。したがって、それぞれの研究には、

それ自身の内部に、(もしわれわれがその研究の内容をふかく飲みこむならば) [ひとを] 教育する力があるからなのです。それらの諸研究は、全体として、すくなくともその概略においてではありますが、大学のなかで遂行されている [あの] 会話を表現しています。そして学生は、自分の大学を、ひとつの声しか聞こえてこない専門学校 (institute) や、マニュアル化したさまざまな声しか教えられない技術専門学校 (polytechnic) ととりがちがえるようにまよわされることはけっしてないのです。

そういうわけで、これこそまさに、学生にとって、大学を [他のものから] きわだたせているしるしなのです。というのも、大学とは、かれが、かれの教師や仲間やかれ自身と会話することにおいて教育の機会をもつ場所であり、また、かれが、教育をつぎのようなものと同化するようながされること、けっしてない場所だからです。すなわち、職業のためのトレーニングだとか、商売のための秘訣を学ぶことだとか、将来つくこととなる社会における特定のサービスのための準備だとか、かれが人生をきりぬけるのに役立ついわば道徳的・知的道具一式を獲得することとかと、混同することのけっしてない場所だからです。この種の将来の目的的なものがたがたをあらわすときにはいつも、教育 (それにとって問題なのは個人であって機能ではありません) は、勝手口から昔もなくもれさってしまうのです。それかともたらず権力のために学びをもとめることは、強欲なエゴイズムにその根をもっています。そしてこのエゴイズムは、それがいわゆる [将来学生が実現すべき] 社会的な目的 (social purpose) というすがたをとってあらわれるときにも、だからといって、よりエゴイズティックでなくなったり、より強欲でなくなったりするわけではありません。そしてこうしたことと大学とは、なんの関係もないのです。大学のカリキュラムのかたちには、このような意図はまったくありません。そして、大学での教えかたにも、このような意図はまったくありません。教師が関心をもつのは、生徒自身であり、生徒がなにを考えているかということであり、かれのころの質であり、かれの不死の魂であっ

て、その生徒がいったいどんな教育指導者や行政官に養成されうるかといったことではないのです。

しかしさらに、大学には、以上のこととはべつに、学生に提供すべきことがあります。そして、そのことをわたしは、大学の [学生にたいする] もっとも [大学らしい] 特徴的な贈りものであると考えています。なぜなら、その贈りものは、ほかならぬ大学のみにも属しているのですし、また、はじめでもおわりでもない中間としての大学教育の性格に根ざしているからです。ひとは人生のいかなるときでも、学び [学問] の [そのひとにとつて] あたらしい分野を開拓しはじめることができずし、はじめの活動に従事することができません。しかし、かれが、自分の時間とエネルギーのかざられた資源を配列しなおすということなしにこれをなすのは、大学においてだけです。というのも、大学以後の人生においては、かれはあまりにもおおくのこととらに自分をしばってしまえますので、それを投げ捨てることは容易ではないのです。大学の [学生に贈る] 特徴的な贈りものは、幕間 (interval) という贈りものなのです。ここにあるのは、青年期のさしせまった義務を棚上げし、しかしただからといって、その代わりになるようなあらたな忠誠を同時に誓う必要もないという、そうしたひとつの機会です。ここにあるのは、とりかえしのつかないできごとの暴君的な流れのなかでの中断 (a break) [息ぬき] です。すなわち、世界と自分自身についていろいろなしかたで考えをめぐらし、しかしそうしているあいだに、敵の気配を背後に感じることもなく、また、決断しなければならぬというたえざるプレッシャーからも自由である、そうした期間です。また、神秘をあいまいながら、同時にその解決をさがす必要もない、というそういう瞬間です。しかも、こうしたことのすべてが、[いわば] 知的な真空のなかでおこなわれるのではなく、継承されてきたすべての学識、そして、われわれの文明がつくりだしてきた文献と経験にとりかこまれておこるのです。しかも、ひとりぼっちではありませぬ。おなじ精神をもった仲間が同行してくれれます。かれの勉強は単一の仕事

ではなく、認知された学問分野を研究するためのディシプリンにとまなわれ
ています。そしてかれの教育は、まったくの初等教育（つまり、どう行動し
よう考えるかをまったく知らない人びとのための教育）でも、裁きの日〔死〕
にむかうひとのための最後の教育でもなく、ちょうどその中間としての教育
です。こうした幕間〔としての大学教育〕は、一息つくための休憩のように
陳腐なものではけっしてありません。もしそうだったら、そんな機会にたい
してどんな若者も「ありがとう」などと言わないうだらうとわたしは思います。
というのも、そうした幕間は、活動の停止なのではなく、他に類のない活動
の機会だからです。

このような注目すべき機会がいつごろからできたのかを決定することはな
かなかむずかしい。おそらく、(ルクレティウスが人間の手足がそうやって
発生したと想像したように)さまざまに程度においてそうした機会を利用して
きる人びとがいたということから発生したのでしょう。いづれにしても、こ
の機会には、ヨーロッパにおけるすべての大学が、あるしかたで、その学生た
ちにたいして提供しているひとつのことがらです。その機会を享受するため
には、あらかじめなんらかのしかたでの準備ができていなくてはなりません
(だれであれ、保育園で学んでいなければならないことを身につけていなかっ
たら、そうした機会を利用できるとは期待されえないでしょう)。しかし、
その機会を享受するために、あらかじめ存在する特権として定義されるよう
なものが必要であるとか、結局のところ生計をかせぐ必要がないという身分
が必要であるといったことはありません。そうした機会の享受は、それ自体、
「学生 (student) [研究する者]」であることの特権なのです。すなわち、
スコラー (scholar) (余暇) の享受なのです。あえて誤解をおそれずにいえ
ば、この点を、大学の性格についてのひとつの理論にまで濃縮することもで
きるでしょう。すなわち、それを、合間 (interim) の理論と呼ぶこともで
きるでしょう。しかし、こうした理論は、かの〔新学期がはじまる〕十月一
日の朝、この機会が学生にどんなふうにも感じられるかということをもてみじか

に表現するものにすぎないとも言えます。ほとんど一夜にして〔その日の朝
になってみると〕、不快な事実からなる世界は溶け去り、無限の可能性と化
しています。どんな「有閑階級」にも属していないわれわれは、つかのま
はあっても、アダムの呪い、すなわち、仕事と遊びとのあいだの耐え難い区
別から解放されたのです。われわれのまえにひらけているのは、一本の道で
はなく、はてしなくつづく海原です。というのも、それは、自分の帆を風に
むかってひろげるのに十分なほどひろいからです。直接むかうべき目的は
なく、そうした目的地があるということからくる落ち着かない緊急性もあり
ません。義務はもはや重くのしかかかってはいません。退屈や失望ということ
も、いまや意味のないことばです。死も考えることすらできません。しかし、
「かならず」おわりがくるということは、合間ということの性格に属してい
ます。というのも、すべてのものには時があり、なにごとともその時をええて
はつづかないからです。永遠の学生とは、進むべき道を見失った魂 (a lost
soul) のことなのです。

ところで、「大学教育の」成果についてはどうでしょう。このような大学
から、なんの刻印もつけずにでいく者はひとりもいません。知的には、か
れは、ある知識を獲得したと想定されるでしょう。そして、それよりもっと
重要なことなのですが、ある種のところの規律、ことごらの帰結をつかま
える能力、かれ自身の諸能力にたいするよりいっそうの支配力といったものを
身につけたと想定されるでしょう。おそらく、かれはつぎのようなことを知っ
ているでしょう。すなわち、「意見 (a point of view)」をもつただけでは十
分ではない、必要なのは思考 (thoughts) なのだ、ということ。かれ
が大学をでていくとき、かれがもっているのは、かれが信じていることがら
の真理性を証明するための論拠という武器一式ではなく、かれ自身を知的フー
リガンのおよぶ範囲からつれだしてくれらるなにかをかれは獲得しているでしょ
う。そしてかれの研究のテーマがなんであれ、かれは、人類をおおきく動か
してきたことごらのなかにある意味をさがしただすことができるかと期待される

達] (instruction) になり、しかもそれが、学生の時間の全部を占めてしま
うとき、そして最後に、教えられるためにやってくる者たちが、かれらの知
的なたからものをもとめてやってくるのではなく、すでにあまりにも活力を
うしない疲れはてているので、かれらがもとめるのはただ、すぐに役に立つ
知的・道徳的な道具一式を身につけることだけ、といったあたりさまになっ
たとき、すなわち、かれらが、会話の作法をまったく理解せずに出てきて、
しかし、生計をかせぐための資格や、かれらを世界の収奪にむけてときはな
つための卒業証書だけはほしがらうようになったときなのです。

(さくらい・なおふみ 法学部教授)